

光明てらしてたえれば
不斷光仏となづけたり
聞光力のゆえなれば
心不斷にて往生す。

勝林寺ハ報

「**聞光力**」といふことは、あじわい深いことばです。これは親鸞が決して勝手に造られたことばではありません。私たちにとって一番大切なお経『大無量寿經』に「ソノ光明ノ威神功德(すばらしい力)ヲ聞イテ」ということばがあるのをそのまま、「**聞光力**」となさつたのです。それはともかく、「**聞光力**」といふことはやはり味わい深いことばです。普通、光を見るとはいっても観るとは言わないません。音は聞くと言つても観るとは言わないでしよう。

「**不斷光**」といふのは、まず、如来さまが阿弥陀さまとなつて、私を救おうとおはたらきくださつてからずつと、一刻瞬時もたゆることなく、いつも私にはたらきかけてくださる如来さまのお力をたたえたことばです。

その長い長い間には、私は、地獄にいたときもありました。目先の欲に狂おされて餓鬼道にいたでしよう。また如来さまのことはもちろん自分自身の姿さえ見えない畜生の世界にいたのかも知れません。三界六道、果て知れぬ輪回転生をくりかえしたその長い長い間、ずっと断ゆることなく照しつゝけてくださった如来さまです。

「光明てらしてたえれば」
まことに長い、切ない忍耐のときでありました。

この私の迷妄の毒のなかに身をおくとも、わが行は精進にして、忍んで終に悔いざらん(「**讀仮偈**」)といふあの断えまい如来のご苦労がありました。

その不斷の如来のおはたらきを讀えて、
「不断光仏となづけたり」とうたわれるのです。

それからもう一つ、「不断光仏」と讀えられるいわれがあります。それは、いまようやく機の縁が熟して、このいちばな如来さまの願力にからめとられたなら

ば、「ひとたびとりて、ながくすてぬなり」といわれるよう、および声が聞こえて、如來の親心をいただいて信心がひらけたなら、もうその親と子の縁は、どんなことが起つても断絶することなくて、如來の家、如來のいのちのなかに生れかわらせていただくのです。

「**聞光力**」といふことは、あじわい深いことばです。これは親鸞が決して勝手に造られたことばではありません。私たちにとって一番大切なお経『大無量寿經』に「ソノ光明ノ威神功德(すばらしい力)ヲ聞イテ」ということばがあるのをそのまま、「**聞光力**」となさつたのです。それはともかく、「**聞光力**」といふことはやはり味わい深いことばです。

普通、光を見るとはいっても観るとは言わないません。音は聞くと言つても観るとは言わないでしよう。

「**味をきく**」「**聞世音**」(世の音を観る)。
「味をきく」というのは、舌の先だけで感じどるではあります。全身で受けとめてみるのです。觀世音菩薩さまは、多くの小さな世間の凡夫の音を、眼を半眼にして、はるかなまなざしで聽じ容れてくださるのです。

「光ヲ聞く」というのは、耳をかたむけ心をかたむけいのちいっぽいに如來仏のよいわれを聞いているのです。

身いつぱいに如來のお慈悲を聞いてみたら、もう、どうにもこうにも疑いようがなくなつてしまします。

ですから親鸞さま、「**聞光力**」といふのは如來にからめとられた、その疑いようもない信心なのだと、左訓でおしえてくださいます。

出石組 仏婦連盟総会のご案内

日時	六月十五日(日)午前九時半
会場	出石 福成寺
行事	午前 物故会員追悼法要 総会行事 午後 講師 山田 行雄 先生 (岐阜教育大学教授) 「智慧のまなこ」

どうぞ連れだつてご参加ください。

二十二日	本堂等永代経
二十三日	寺務知人プロツク別研修会(播磨岡山)
二十四日	正副組長教化主任研修会(川本)
二十五日	寺務知人プロツク別研修会(福成寺)
二十六日	成田深田宅法事・玉井克郎氏宅葬月
二十七日	教区連研研究会(神戸)
二十八日	夏見寺永代経
二十九日	森井治郎氏宅開明
三十日	「巡回資料」作成要会(本山)

むしろ、煩惱のおこるそのことをご縁として、如來の不斷のおはたらきが歎こべてくるのです。親鸞さまは「正信偈」のなかに、日光ノ雲霧ニオオワルレドモ、雲霧ノ下常ニ

とうたつておられます。

信心ひとたび開けたなら、どんな煩惱でも、どんな障害にも、断えることなく往生淨土の懷かしく晴々とした人生を歩むのだといふところを「心不斷にて往生す」とうたつておられるのです。

開ナキガゴトシ
同
山田行雄氏宅法事・出石組連合仏婦総会(福成寺)

六月のこよみ

一日 関川宝勇氏宅法事・齋藤庄治氏宅法事・出石組組

内会

四日 「念佛奉仕団」

五日 勝林寺弘法婦研修旅行(京都・奈良)

同

七日 「念佛奉仕団」

八日 同

九日 基幹運動本部専門部会(本山)

兵庫教区企画委員会・兵庫教区仏婦幹部研修会(神戸)

兵庫教区仏婦幹部研修会

教区教化主任協議会(神戸)

高麗華男氏宅法事・出石組連合仏婦総会(福成寺)

森友益氏宅法事

高麗華女氏宅法事・出石組連合仏婦総会(福成寺)

寺務知人プロツク別研修会(播磨岡山)

正副組長教化主任研修会(川本)

寺務知人プロツク別研修会(福成寺)

成田深田宅法事・玉井克郎氏宅葬月

教区連研研究会(神戸)

夏見寺永代経

森井治郎氏宅開明

「巡回資料」作成要会(本山)



自 分 の
いちばん危険な
墮し穴

生きられた人が
死にきれること

生きられる。
死にきれること

生きられてこそ
生きられる。

生死を越えてこそ
まことの生死がある。



五月十四日

葬儀

日殿 森井 まき様

私は今

仏婦藤川貴恵

私はいつたい何のために生れてきたのか。
私はいつたい何のために生きているのか。
そして私はこれからいつたいどうなつていく
のか。

自からに問い合わせ思ひめぐらして、六十の坂
をとづくの昔すきでしまつた。

み教えとの出会いは若いときからだつたと思
つてゐる。

それはしかし上へだけで、たゞご恩よおかげ
さまよとくらしていたつもり。仏法をお聞かせ
いたゞいているというだけで、右の耳から左の
耳へとつゝ抜けで、残つたものはなかつたので
あろう。

それが突然、大きな岩につまずいて、倒れて、
もうどうなつてもいいとなつたとき、そのとき
はじめてこんなことを考へた。

「人生は、長生きではない。めざめである」

とお聞かせいたゞいたおことばが、悩ましい
いに浮かんできた。

死とは無縁と思つてゐるのに、まわりを見れ
ばその死の影がすでにそばにある。お育て
いたゞいていながら、ただただ恥じるばかり
である。

私は、大事なことを忘れてはいる。
何を。
この世に生れ出たのは、仏法を聞くためだつ
た。

いま思えば母の死も、仏法に近づけるための
厳しい私へのお手まわしであつた。この私のため
に、手をさしのべてくださる如
来さまのあることを。

私が、如來の前に、いまようやく、かたくな
心がうちくだかれ、あらためてたゞひたすらに

仏願の生起本末を、とことんまで命のある限り聞
くより他ないと、そういう思いにたどりつけた喜
びが、今私の全身をゆり動かすのです。



大なる出発

結婚後、長らく子宝
に恵まれなかつたシツ
タルタ太子に男子が生
れ、ラーフラと名づけ
られました。世継ぎが
誕生して今は思い残す
こともなくなつた太子
は、いよいよ求道の旅
に出ることを決意され
ました。

ある夜、宵のうちに
酒盛りに、侍女た
ちは疲れはてて、あち
こちで酔いつぶれぐつ

御迦様のご生がい

すり眠つていました。「今こそ!」と太子
は、そつと愛児に別れを告げ宮殿の外へ出
られました。愛馬カンタカにうちまたがり
馬丁のチャンナが轡をとりました。太子の
出家を祝う天の神々が、カンタカの脚を支
えて蹄の音を消しました。城門が閉つたま
ま、太子たちは城壁高くとび越えて、満天
に星の降る城外へ出ました。

われております。

わかれ

カビラ城を出た太子の愛馬カンタカは夜
とおし走りつゝけました。やがて東の方から朝が
近づいてきました。大きな川のほとりに着きました。

太子は馬を降り、身に着けていた美しい衣服や
飾りをとつて従者チャンナに与え、チャンナの粗
末な服と交換されました。頭髪も切つて肉親への
形見とし、チャンナとカンタカに別れをお告げに
なりました。チャンナの目には涙があふれました。
カンタカも悲しそうにいなきました。しかし大
きな決意をなしとげるためには、どんな悲しみも
どんな苦しみも、乗り越えてゆかねばなりません。

今は一介の乞食修行者となつた太子は、たゞ
この世に生れ出たのは、仏法を聞くためだつ
た。

人、さとりの道(彼岸)に向つて、およきな歩
みを開始されたのでした。

「出石組」正副組長・教区会議員の改選

正副組長	山崎一朗	(正福寺住職)
副組長	李春	(光福寺住職)
同	西池哲俊	(勝林寺住職)
教区会議員	本多竜雄	(乗寺寺住職)
同	志水与一	(本覚寺住職)

「私のお念佛」

永年わたつて理髮業を営んでおられるわが村
わが同胞の山田富雄さんが今度、新しく店を新築
されました。

新しい設備とともに、修行して新しい技術を身
につけられた息子さんが帰郷して後を継いで、親
子二人して営業されることになつたことは、私たち
にとても本当にうれしいことです。

今後のご繁栄を村民・お同行みんなして応じる
次第です。

私たち、いや生物すべてが、いちばん大切にし
ているもの。「いのち」。

南無阿弥陀佛。

仏社宮嶋千秋



なかでも人間のいのちには、現在国家の保障
があります。いのちの健康の保障も社会がして
くれます。

けものや虫にはしかしいのちの保障はありません。
にもかくわらず、それらのもの・虫のいのち
よりも、私のいのちが、みにくきたないもの
であつては申わけないと思います。

それが実際には、私のいのち、あさましい見
にくいのちであるのかも知れません。

今日はひとつ、いらぬものゝ整理をしてお
と、捨てるものを出してみました。

さて、これまだ使えるものではないか。ま
だ「いのち」のあるものではないか。ま
少し手を加えれば「いのち」が続くのではないか
いのか。そんなことを思つていると、なかなか捨てき
れません。

これらの物にも、それぞれ「いのち」がある
のだとすると、それは、その物がそこにある「ね
うち」があるということ。まだ何かの役に立つ
といふことではないのか。

を考えると、
ここに生きていてもいなくても、何の意味も
のだとすると、それは、その物がそこにある「ね
うち」があるということ。まだ何かの役に立つ
といふことではないのか。

にもかくわらず、現に「生きている」という
ことには、どういう意味があるのだろうか。
にもかくわらず、今ここに「生きている」と
いうことには、どういうねうちがあるのであろ
うか。

私はいま、あれこれそんなことを、「私のお
念佛」に聞いてみています。